

Ⅲ-11 「コラム」 大学が行う 「湯舟坂プロジェクト」 始動当初の取り組み

土井 悠起

京都府立大学文学部考古学研究室（以下、考古学研究室）は、2020年度にACTR「丹後半島における文化遺産の地域資源化に関する総合的研究」に採択されたことを皮切りに、京丹後市教育委員会、・京都府立丹後郷土資料館と共同で、基礎資料の掘り起こしを進めてきた（諫早2021）。2021年度からは「湯舟坂プロジェクト」という形で京丹後市須田区内の遺跡の活用に向けて本格的に活動を開始し、ACTR 成果報告会「地域資源としての湯舟坂2号墳」の開催や、来場者向けの遺跡活用に関するアンケートの実施、湯舟坂2号墳慰霊祭への参加、須田区全戸配布のアンケート、須田区内の須田平野古墳の案内看板の設置など、遺跡の保存・活用に向けての取り組みを行った。同年度は依然として新型コロナウイルスによる影響を受ける中ではあったが、その後の須田区との関わりを強める契機となる1年であったと振り返る。

今回の活動における大きな意義の一つとして、地域住民の意見・思いを知ることができたという点が挙げられる。2021年度に実施したアンケート内での定量的な分析（土井2022）により、湯舟坂2号墳や考古学研究室の取り組みに対する認知度等を把握できたことに加え、地域住民との協同作業や対面での意見交換などの場が、彼らの生の声を聴き、より深くその思いに触れる貴重な機会となった。とりわけ地域住民との直接的なやりとりを通じて、大学側の取り組みが不透明で見えづらいといった声や、地区内における遺跡を守るための作業への協力を求める声など、プラスの声だけでなく改善・協力を求める意見をいただいてこそプロジェクトを前進させていけることを実感した。そしてその前段階として、まずは地域住民との接触密度を大きくし、彼らの暮らしを知り、背景を知り、思いを知ることが肝要であることも今回の活動における大きな教訓であった。事実、このプロジェクトの始動当初は互いに顔合わせをする機会は決して多くなく、大学と行政、地域と行政という形で関係性がどうしても分断されている感があったが、徐々に対面でのやり取りが増える中で、思いや方向性がすり合っていく感覚をもって活動を進めることができた。それまではあくまで大学としての一活動という側面が強かったものが、徐々に「もっと役に立ちたい」「一緒に進めたい」という思いの乗った活動に移り変わっていったことも記憶に残っている。

また、様々なステークホルダーとの協働を通じて活用への第一歩を踏み出すことができた点も大きな成果の一つだろう。活動の中では、須田区内の地域住民や京丹後市教育委員会との緊密な連携に加え、奈良文化財研究所の栗山雅夫氏による最新のデジタル撮影機材を用いた出土品の再撮影や、株式会社相互技研の協力のもと、湯舟坂2号墳の横穴式石室の写真三次元計測などが行われた。少子高齢化やそれに伴う地域の過疎化などの社会課題が叫ばれて久しい中、1つのコミュニティ、一つの機関・団体で地域の課題を解決することはより一層困難を極めており、今回の「湯舟坂プロジェクト」の舞台となる須田区も例外ではない。そうした状況で突

破口となるのは、行政や地域住民の積極的な動きの促進と、専門性や知見を活かした外部機関との共創関係の構築である。そうした点で、遺跡活用を本格始動した2021年度は、今後様々な研究機関と関わっていきながら活動を進めていくための土壌を作る糧となったのではないだろうか。

以上、2021年度を中心とした活動を振り返ってきたが、こうした取り組みは一過性ではない、継続したものであることがなにより不可欠である。成果も多かった一方で、当時のアンケートや地域住民の声からは、湯舟坂プロジェクトに対する認知度が低い点、地域住民との共同作業が少ない点、遺跡の場所とそこから出土した遺物との物理的な距離が離れすぎている点、区内の高齢化といった多岐にわたる意見が挙がり、様々な課題が山積した状態であった。それらの解決にあたっては、中長期的な視点で取り組みを継続し、その取り組みの認知度を上昇させ、関係人口を増加させていくことが遺跡の活用に繋がり、ひいては地域における喫緊の課題である少子高齢化への処方箋にもなりうる。

大学は調査機関としてのみならず、調査成果を地域に還元し活用していく主体としての役割を持っており、地域の中で永続的に遺跡が保存・活用されるような仕組みを構築していくことが求められる。今回「湯舟坂プロジェクト」始動当初を振り返ってきたが、そうした意味で、この草創期の活動を切り口に翌年度以降の活動につながっていることは大きく、初年度に作成したポストカードや看板などがその後も発展して活用されていることは非常に嬉しく思う。また同時に始動当初の志・思いが、主体となる人が変わっても遺跡を中心にして残り、繋がり続けられることが文化遺産そのものの可能性なのだと思う。今後、これらの活動がさらにアップデートされ、「地域に開かれた」遺跡活用の取り組みに引き続き期待したい。

参考文献

- 諫早直人 2021 「古墳を地域資源化する―湯舟坂2号墳プロジェクトの挑戦―」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科、pp.30-31
- 土井悠起 2022 「大学が行う遺跡の活用―和束町と京丹後市での実践―」『文化財の保存活用と地域コミュニティ』（京都府立大学文化遺産叢書第23集） 京都府立大学文学部歴史学科、pp.117-138

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2